

校長先生の初恋物語

第65話 ちん君におそいかかるアクシデント

6年2組の頭脳、ちん君が走って行きます。とにかくちん君も、とっくに負けないくらい小さい。小さいということは、足も短い。さらにはちん君、体も弱くて、すぐにゼーゼーしてしまいます。いつも苦しくなったら、自分で「吸引(きゅういん)」という薬をシュツとしています。



ちん君も、足が遅いことは分かっています。ここで1組、2組につめられるのは仕方ないと思っています。ここはがまんの時です。

ちん君は、がんばろうとしていました。でも、ちん君の顔はすぐに苦しそうになりました。

「ひゅーひゅー。」

ちん君の苦しそうな呼吸が聞こえてきました。この呼吸がしたときは、いつもはすぐに「吸引」をしています。でも、今は、そんなことしている場合じゃありません。

「ちん君。歩いていいよー。むりはするなー。」

ちん君は全力で走るのをあきらめました。そして、ゆっくりと走りながら次の人をめざしました。本当は苦しくて歩きたいんだと思います。でも、ちん君はゆっくりでも、走っていました。苦しそうに息をしながらゆっくりと走りました。絶対に歩こうとしないのは、きっとみんなのためです。すごいよ、ちん君。

ちん君は、アマーラさんを助けました。コージ君のダメな心を変えました。ミッタをつくって、最後はクラスのみんながミッタになりました。ちん君は、どんな時でも、どんな人にも、差別をしない、すべての人を大事にできる人



です。そんな気持ち、6年2組のみんなも、今も持っています。ちん君は、ちん君がよかったです。次の人にバトンを渡しました。ちん君は、ずばり薬を出して吸って、苦しなのに、近づいた仲間に、「ゼーゼー、ごめんね。ゼーゼー、ごめんね。」とあやまっていた。

ちん君。あやまる必要なんて、これっぽっちもないよ。みんなちん君には感謝している。一番感謝しているのはね。だれだと思う？ そうだよ。アマーラさんだよ。そのアマーラさんが、ちん君のバトンをもらったんだよ。

さあ、いけ、アマーラさん。走れ、アマーラさん。このあと、アマーラさんは、全校のみんながびっくりするような、見たこともない走りを見せてくれるのです。

次回予告
よみがえったガブ

